

第1回 ライトノベル作法研究所主催 大夏祭り大会 選評評価シート

作品名:「ひと夏の悪霊」

テーマ:「悪霊なのに、ひどく臆病でビビリな美少女」

キャラクター

60

ストーリー

45

テーマ(設定)

55

文章力

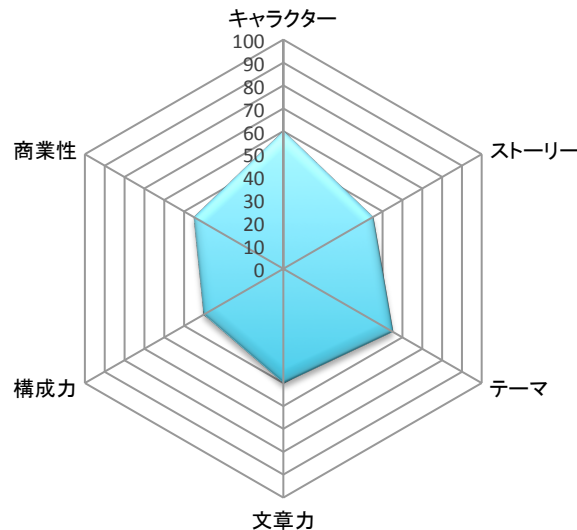
50

構成力

40

商業性

45



・見受けられる基礎的な問題点

- ・キャラクターに個性がない(もしくはその個性を生かしきれていない)
- ・キャラクターの設定にオリジナリティがなく、読んでいて新鮮さに欠ける
- ・キャラクターの行動に動機がなく、物語がご都合展開になってしまっている
- ・物語の方向性が定まっておらず、読む側にだるさを感じさせてしまっている
- ・物語に登場人物達にとっての障害が登場せず、盛り上がり欠ける
- ・テーマ(世界観)が既存の作品の焼き回しで差別化されていない
- ・物語上必要のない設定を多く登場させ過ぎている
- ・意味の無い暗いテーマ(人の死、暴力等)が扱われており、後味が悪い
- ・プロットの練り方が甘い(基本的な起承転結が意識されていない)
- ・時系列の流れが不自然、もしくは視点移動が多過ぎて構成が理解しにくい
- ・物語の情景描写が足りず、読んでいて状況を想像できない
- ・文章が難解かもしくは文法的に問題があり、よく読まないと内容が理解できない
- ・伏線的な要素がなさすぎて驚きに欠ける
- ・笑いをとれる下ネタが少なく、読んでいて冷める下ネタが多い
- ・「この作品の最大の魅力はこれ!」というものが無い

・総評 (もしくは、今後これをやったら更に面白い作品を書けるようになるかもという話)

物語の軸が若干ぶれている。志津音の人間克服がテーマであったはずが、徐々に主人公と普通の青春物語にテーマが移って行き、正直志津音は必要だったか? という印象さえ抱く。冒頭の入り方が非常に面白く、志津音はどうかという設定は期待を寄せている分、出来れば最後まで志津音中心で走りきるべきであった。「志津音、今の様子なら、驚愕実況もクリアできるだろう。俺たちの力ももう要らないよな? 頑張れよ」というセリフが唐突に飛び出したあたり、読者からすると「え!?」感はある。しかし「特殊な霊になるには納涼義塾学園で資格をとる必要がある。そして悪霊を目指して頑張る悪霊見習い美少女」という設定自体は最高に面白いので、可能性を感じるという意味で非常に伸びしろを感じる作品であった。

・出だし。「きやああああああ」と、叫んだのはお前かい!これだけで「悪霊なのにビビリな美少女」のテーマの面白さが伝えられている。出だしとしてとても面白い。

・真お婆さんや驚愕実況など、言葉の遊び方や遊び方にセンスがある。個人的には一番好きだったのは「ええやんけ」。

「その後、お化け屋敷に足を踏み入れ、三歩で志津音は気絶した。『があまりに驚き過ぎた。一応お化け屋敷を目的として遊園地に来ている設定になっている以上、もう少し気絶するシーンやお化け屋敷の具体的な描写が欲しい。もしもはいっそのこと、「お化け屋敷に行く」という目的を「遊園地について人ごみに慣れる」という目的に変え、遊園地の中でまたま目に入ったお化け屋敷に思いつきで行ってみることになったとするか。」

冒頭で主人公たちが志津音と初めて出会ったシーンは建物内の暗闇ではなかったか? その時志津音は怯えてはいるものの意識はしっかりとっており、暗闇が気絶する程苦手という設定には不自然さを感じる。作品における目的が「暗闇克服」と「人ごみ克服」の二つにぼやけてしまっているため、ここは思い切って人ごみ克服だけに焦点を当てた方がストーリーがより分かり易くなると思われる。

合計加点ポイント 0

総得点: 295 / 600

B方式総合得点: 14504 点